

徳永和博

大阪大学大学院

toku8nn@gmail.com

## 要旨

本発表は, *so-inversion construction* (以下 SIC) を対象に, その談話機能を探ることを目的としている。ここでは, 大規模コーパスより抽出した用例を対象に, Givón (2018) の手法を援用して, 先行文脈および後続文脈を分析した調査結果を提示する。結論として, 以下の 4 点を主張する。(i) SIC は, 後続文脈の新規トピック設定のために使われる談話機能を有する。(ii) この談話機能は, 倒置が適用された *as* 節と共通する。(iii) 両構文の機能は, 人称代名詞主語の場合に, より多く見られる。(iv) 両構文は, Lambrecht (1994: 176-183) の “topic-promoting construction” と類似した特徴を持ち, text-external world で active である要素を, text-internal world に導入することによって, 構文内の主語の topic acceptability をさらに向上させる構文である。

## 1. はじめに

(1) の下線部のような *and* を伴った *so-inversion construction* (以下, SIC) は, 先行研究において, (i) *too* を使った文に置き換え可能であり, 倒置した主語名詞句には end focus が置かれる (Biber et al. 1999), (ii) positive clause に使用が限定されており, 主節と同じ主語を使うことができない (Huddleston and Pullum 2002; Duffley 2016) などの特徴が指摘されている構文である。

(1) Gail's in, and so is Lisa.

(Biber et al. 1999: 917)

SIC が用いられている文脈を見ると, しばしば, (2) のように SIC 内の倒置した主語名詞句が後続文脈で連続して具現化している例が観察される (COCA は The Corpus of Contemporary American English の略記。// は段落の区切りを示す)。(2a) は固有名詞主語の例, (2b) は人称代名詞主語の例である。

(2) a. In a space the size of two living rooms, most of the 20-odd passengers are puffing on cigarettes, and so is Abbas. At 76, **he** smokes more than two packs a day. // **Abbas** is about as affable as politicians come – even hawkish Israelis like Ariel Sharon have said so. (COCA: magazine)

b. The soldier wanted to protect his people, and so did we. But **we**'ve all discovered **we** were wrong in how **we** did it. (COCA: news)

興味深いことに, 随意的な主語助動詞倒置が適用された *as* 節にも同様の傾向が確認できる。このような *as* 節の後続文脈では, (3) のようにトピック性の高い要素 (主語・目的語) が現れる (徳永 2019)。

(3) a. She was comfortable in her own skin, as was Edward. **He** walked up beside her and {**he**} said softly, “If [sic] this had been the original, you'd be in jail by now.” (COCA: fiction)

b. All three of Tilley's children, aged 18 to 22, have asthma, as does she. “**I** [= She] did everything **I** [= She] could to make sure these kids were healthy,” **she** says, “but they still came up sickly...” (COCA: news)

*as* 節も SIC と同様に「～も同様だ」という意味で用いられ、倒置構文としては珍しく人称代名詞が節末に置かれる倒置構文である。このような共通点を考えると、SIC にも倒置が適用された *as* 節と同様の傾向が見られるということが予測される。本発表では、Givón (2018) の分析手法を援用し、SIC や *as* 節内の主語を指示する要素が、先行文脈と後続文脈でどのように具現しているかについて分析を行う。結論として、SIC と *as* 節には後続文脈にトピックを導入する機能が見られることを報告する。そして、この機能は Lambrecht (1994) の “topic-promoting construction” と同様の特徴を有するが、同時に、Lambrecht (1994) の枠組みを精緻化するうえで重要な事例であることを述べる。

## 2. 調査方法

### 2.1 コーパス

用例収集にあたり使用したコーパスは (4)、テキストデータの処理の手順は (5) である。

- (4) a. WWW 上の COCA (10 億語超)  
b. COCA の フルテキストファイル (4 億 4000 万語)
- (5) (4b) を対象に、主語を固有名詞か人称代名詞かに分け、ジャンル別 (Academic, Fiction, Magazine, News, Spoken) に SIC や *as* 節 を含む文を抽出。非該当例を排除し、*as* 節の件数に合わせて両構文を含む 50 例を層化無作為抽出によって選定。(4a) で広い文脈を確認しながら、それらの先行文脈と後続文脈を分析。

固有名詞主語については、徳永 (2019) と同様に、end-weight の影響をできるだけ少なくするために 1 語の固有名詞に限定して収集している (*John* など)。人称代名詞主語については、情報量が少ない場合に固有名詞主語と傾向が異なるかを検討するため収集している。

### 2.2 先行文脈および後続文脈の分析の枠組み

本研究では、Givón (2018) の “anaphoric distance” (AD) と “cataphoric persistence” (CP) の枠組みを援用して分析を行う。前者は、ある指示対象を起点として、その対象を指す要素が先行文脈で最後に現れた節まで、何節遡れば辿り着けるかを見る方法である。後者は、前者と逆向きの計測方法である。この手法は、倒置構文を調査するための方法ではないので、本調査では (7) のように若干の修正を施している。

- (6) Givón (2018) の AD および CP の計測方法
  - a. AD: 直前の節で言及される場合は AD 1。2 節から 3 節前では AD 2/3。3 節より離れた距離で言及される場合は AD >3。
  - b. CP: (i) ある指示対象が後続文脈内で何度言及されているか (Givón 1994, 2017), もしくは, (ii) その指示対象を指す要素が何節連続で後続しているか (Givón 1983)。
- (7) 本研究の AD および CP の計測方法
  - a. AD: 観測範囲は、先行文脈 5 節までとする。AD 1, AD 2/3, AD >3 は Givón (2018) と同様だが、AD 1 とそれ以外を区別する (表 1 および 表 3 参照)。
  - b. CP: (6bii) を採用。観測範囲は、後続文脈 5 節までとする (後続の節を深く見すぎると、どれだけ倒置が影響しているかが分からなくなるため)。直後の節で指示対象を指す要素が生

起していれば CP1。連続して後続 2 節以上具現していれば CP2。指示対象を指す要素がなければ CP0。AD と同様に、CP0 とそれ以外を区別する (表 1 および表 3 参照)。

### 2.3 SIC および *as* 節内の主語名詞句を指す要素の分類

本研究では, Givón (2018: 124) の文法役割に関するトピック性の順序付けを参考に, SIC や *as* 節の主語名詞句を指す要素を分類した。

(8) Topicality ranking of grammatical roles:

Subject > Object > Others

(Givón 2018: 124 より本文に合わせ改変)

ただし, (8) の分類では (9) のような例が正しく分析できないという問題がある (下線は徳永)。

(9) [...], and **so have we**. Today, 77% of us own at least one outdoor grill (41% own two), and **we** bought close to 11.4 million new grills last year. (COCA: magazine)

(9) の下線部では, 斜格の *us* が主語位置に来ているが, (8) をそのまま適用すると *others* となってしまふ。しかし, *77% of us* 全体は主語位置に生起している。そのため, 本研究では, (9) のように SIC 内の主語名詞句を指す要素が *others* のものでも, 名詞句全体で主語や目的語として機能している場合は, Subject か Object として認定する。

### 3. *So-inversion construction* の傾向と談話機能

表 1 から表 2 は, 各 AD と CP の分布をまとめたものである。AD 1 は SIC 内の主語名詞句が直前の節で現れていた場合, AD > 1 は 2 節から 3 節以上前で離れて現れている場合である。この場合は, SIC 内の主語名詞句が AD 1 よりも話題になっていない環境である。CP ≥ 1 は, 直後の節, あるいは, 直後の節を含めて後続 2 節以上連続して具現している場合である。CP0 は, 直後の節を含めて SIC 内の主語名詞句が連続して具現してない場合である。

表 1 主語タイプ別の AD と CP の分布 (SIC)

主語のタイプ	[1] AD1/CP0	[2] AD1/CP≥1	[3] AD>1/CP0	[4] AD>1/CP≥1	Total
固有名詞	0 (0%)	0 (0%)	36 (72%)	14 (28%)	50 (100%)
人称代名詞	3 (6%)	2 (4%)	21 (42%)	24 (48%)	50 (100%)

(Fisher's Exact Test の結果は  $p = .004 < .05$  で有意。効果量是中 (Cramer's V = 0.35))

固有名詞主語を持つ SIC の場合は, その主語名詞句が直前・直後に生じにくい。表 1 では, AD 1 の例 ([1] と [2]) は見られない。また, CP0 の比率 ([1]+[3]=72%) が CP ≥ 1 の比率 ([2]+[4]=28%) よりも高い。つまり, SIC 内の固有名詞主語は後続文脈の中で, 重要なものとして認識される傾向は少ない (補足情報に留まる)。一方, 人称代名詞主語の場合は, AD 1 の例も少数ながら存在しており, CP ≥ 1 の比

率 ([2]+[4]=52%) が CP0 の比率 ([1]+[3]=48%) よりも高くなっている。つまり、SIC 内の人称代名詞主語は、後続文脈の中で重要なものとして認識される傾向がある。固有名詞主語と人称代名詞主語の分布の対照性は、Halliday and Matthiessen (2014) の用語を借りれば、固有名詞主語の SIC は結束性や情報構造に関わるテキスト形成的機能 (textual metafunction) が人称代名詞主語の場合よりも弱いといえる。

次に、SIC によって後続文脈に導入された要素がどのようなものかを見てみよう (表 2 中の「個」は「固有名詞主語」, 「代」は「人称代名詞主語」, 「主」は「主語」での具現化, 「目」は「目的語」での具現化, 「そ」は「その他の格」での具現化。単独で書いてあるものは直後の節のみでの具現化であり、矢印で結ばれているものは CP 2 まで連続して具現しているパターンである)。表 2 が示すように、いずれの場合も、主語(8) で topicality が最も高い要素) として具現化している例が最も多い。用例を (10) と (11) に挙げる (用例中の数字は先行文脈および後続文脈の節数である。先行文脈にはマイナス記号を付記している)。

表 2 CP の具現化の分布 (SIC\_AD 1 の例を除いたもの<sup>1)</sup>)

	主	主→主	主→目	主→そ	目	そ→主	そ→目	そ→そ	そ	計
固	7	4	1	0	1	0	0	0	1	14
代	8	9	0	2	0	1	1	2	1	24

(10) 固有名詞主語: AD>1/CP≥1 の例 (具現化が見られない箇所は省略)

[-1][...], **and so did Step**. [1] Actually, **Step** had two careers, [2] so while **he** [= Step] hated working with some of those strange people at Eight Bits Inc., [3] **he** [= Step] had the relief of Sundays, a chance to talk to people who understood the way [4] **he** saw the world, [...] [5] For **Step**, [...]. (COCA: fiction)

(11) 人称代名詞主語: AD>1/CP≥1 の例 (具現化が見られない箇所は省略)

[...] [-2] **he** [=Mr. Joumaa] said. [-1] “People are angry with Fatah and its performance, **and so am I** [=Mr. Joumaa]. [1] **I**’m one of the angry members of Fatah. [2] But **we** express **our** anger inside. [3] **We** face a bigger challenge now from Hamas, and in a difficult situation [4] **we** <S> stand together.” (COCA: news)

表 1 と表 2 を踏まえると、SIC は構文内の主語名詞句が先行文脈で話題になっていない環境 (AD > 1) で使われ、SIC 内の主語は後続談話で主語として導入される傾向があることが分かる。そして、特に、その傾向は人称代名詞主語の場合に多く観察できる。これは、SIC の構文使用の動機づけとして、補足情報を提示する以外にも、後続文脈に (主節とは異なるという意味で) 新規の主語を導入するという談話機能が要因として働いていることを示唆している。

#### 4. 倒置が適用された as 節

興味深いことに、SIC の傾向は随意的な主語助動詞倒置が適用された as 節にも見られる。主語のタ

<sup>1</sup> AD1 の例を省いているのは、直前の節で言及されている例を含めると、当該構文のトピック導入の効果を正確に測れないためである。AD1 の例を省いてもトピック導入の例が多く見られることが重要である (as 節も同様)。

イプ別の分布をまとめたものが表 3 である。

表 3 主語タイプ別の AD と CP の分布 (倒置が適用された *as* 節)

主語のタイプ	[1] AD1/CP0	[2] AD1/CP≥1	[3] AD>1/CP0	[4] AD>1/CP≥1	Total
固有名詞	0 (0%)	0 (0%)	36 (72%)	14 (28%)	50 (100%)
人称代名詞	1 (2%)	3 (6%)	26 (52%)	20 (40%)	50 (100%)

(Fisher's Exact Test の結果は  $p = .04 < .05$  で有意。効果量は小 (Cramer's V = 0.25))

*as* 節の場合も **SIC と共通した分布となっている**。表 3 の AD 1 ([1] と [2]) では、固有名詞主語の例は見られず、CP 0 の比率 ([1]+[3]= 72%) が CP ≥ 1 の比率 ([2]+[4]= 28%) よりも高い。ここでも、**固有名詞主語が直前・直後に生じにくい傾向が確認できる**。つまり、***as* 内の固有名詞主語も後続文脈の中で、重要なものとして認識される傾向は少ない (補足情報に留まる) といえる**。一方、人称代名詞主語の場合には、SIC のように逆転はしないものの、CP 0 ([1]+[3]= 54%) も CP ≥ 1 ([2]+[4]= 46%) もほぼ同じ比率で用いられるという変化が見られる。つまり、***as* 内の人称代名詞主語は、後続文脈の中で重要なものとして認識されやすいといえる**。

後続文脈における要素にも共通点が見られる。表 4 は後続文脈において具現化された *as* 節内の主語名詞句の分布である。

表 4 CP の具現化の分布 (*as* 節\_ AD 1 の例を除いたもの)

	主	主→主	主→目	主→そ	目	そ→主	そ→目	そ→そ	そ	計
固	3	4	0	1	0	0	1	1	4	14
代	6	10	0	1	1	0	0	0	2	20

SIC の場合と同じく、主語助動詞倒置が適用された *as* 節においても、**人称代名詞主語の場合には、主語が直後の節、または、連続して具現化しているパターンが固有名詞主語の場合よりも多く見られる**。

(12) 固有名詞主語: AD>1/CP≥1 の例 (具現化が見られない箇所は省略)

[-1] he does have his limits, **as does Diaz**. [1] **She** doesn't like nude scenes. [2] "**I** [= Diaz] don't think [3] it really adds to the plot," [...]  
(COCA: news)

(13) 人称代名詞主語: AD>1/CP≥1 の例 (具現化が見られない箇所は省略)

[-1] The surface of the planet is mostly water, **as are we**. [1] At least occasionally, **we** ought to be able to drink any trailside or roadside water [2] **we** happen upon. [3] **I** always like the scene in Western movies [...]  
(COCA: magazine)

随意的な倒置の動機づけという点から見ると、*as* 節の固有名詞主語は、その重さが理由で倒置が適用されているが、人称代名詞主語の場合には、contrastive focus だけでなく、(こちら主節とは異なるという意



り, active の情報性を持つ要素である。Lambrecht (1994) の主張に従えば, 両構文は, active → active ということになり, “topic-promoting construction” として機能してない構文になってしまう。しかし, これは, text-external world で active であることと, text-internal world で active であることを同質のものと考えてることによって生じる問題である。本研究で検討している 2 つの構文は, 人称代名詞主語の場合に, 後続文脈において主語での具現化が比較的多く見られるため, 構文内の主語の topic acceptability は増している様に思われる。これは, text-external world で active である要素よりも, text-internal world で active な要素の方が topic acceptability が上であることを示している。つまり, SIC および倒置が適用された *as* は, text-external world で active である要素を, text-internal world に導入することによって, 構文内の主語の topic acceptability をさらに向上させる “topic-promoting construction” と特徴づけることができる。

## 6. 結論

本研究では以下の 4 点を示した。(i) SIC は, AD >1 の環境で, 後続文脈の新規トピック設定のために使われる談話機能を有する。(ii) この談話機能は, 倒置が適用された *as* 節 (e.g. ..., *as did he.*) と共通する。(iii) 両構文の機能は, 固有名詞主語の場合よりも, 人称代名詞主語の場合に, より多く見られる。(iv) 両構文は, Lambrecht (1994: 176-183) の “topic-promoting construction” と類似した特徴を持ち, text-external world で active である要素を, text-internal world に導入することによって, 構文内の主語名詞句の topic acceptability をさらに向上させる構文である。

## 参考文献・コーパス

- Biber, Douglas., Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.
- Davies, Mark. (2008–) *The Corpus of Contemporary American English: more than one billion words, 1990–present*. <<https://corpus.byu.edu/coca/>> (2021 年 1 月 10 日アクセス)
- Duffley, Patrick. (2016) “The Role of DO-auxiliary in Subject-Auxiliary Inversion: Developing Langacker’s Notion of Existential Negotiation,” *Cognitive Linguistics* 27 (2), 269-287.
- Givón, Talmy. (1983) “Topic Continuity in Discourse: An Introduction,” *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study* ed. by Talmy Givón, 1-41. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Givón, Talmy. (1994) “The Pragmatics of De-Transitive Voice: Functional and Typological Aspects of Inversion,” *Voice and Inversion* ed. by Talmy Givón, 3-44. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Givón, Talmy. (2017) *The Story of Zero*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Givón, Talmy. (2018) *On Understanding Grammar* (rev. ed.). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen Christian. (2014) *Halliday’s Introduction to Functional Grammar* (4th ed.). London: Routledge.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 徳永和博. (2019) 「随意的な主語助動詞倒置が適用された *as* 節の文脈的機能とその特徴—倒置現象と文脈的機能のインターフェイス—」 『語用論研究』 21, 139-160.